

調査・実践報告

「ロシア言語文化論（ロシアのことわざ）」
ー ロシア語による講義の方法と教材（1）

“Russian cultural studies”

practical method and materials of lecture in Russian (1)

水上 則子、リュドミラ・クラピーヴニク*
MIZUKAMI Noriko and KRAPIVNIK Ljudmila

1 はじめに

「ロシア言語文化論」は、授業目標として「ロシア言語文化を特徴付けるテーマを選び、ロシア人教員がロシア語で講義を行う。ロシアの言語文化について理解を深めると共に、ネイティブスピーカーが一定のテーマに基づいて行う講義を聞き取り、内容を理解する訓練とする」（シラバスより）ことを掲げ、国際地域学科東アジアコース・ロシア語選択科目として配当されている。新潟県立大学におけるロシア語教育カリキュラムの総仕上げとなるべく位置づけられている科目で、最終学年の学生を対象としているため、2012年度に初めて開講され、2013年度が2回目である。

第7セメスターに「ロシア言語文化論A」、第8セメスターに「ロシア言語文化論B」が開講される。「ロシア言語文化を特徴づけるテーマ」として選ばれたのは「ことわざ」と「詩」であるが、本稿では「ことわざ」をテーマとしている「ロシア言語文化論A」について報告する。

2 企画から開講まで

外国語教育にはさまざまな目標設定があり得るが、当該外国語を用いて学修を深めること、すなわち、学術論文などの参考文献を講読したり、講義を

* 新潟県立大学国際地域学部 (mizukami@unii.ac.jp)

** ロシア国立太平洋大学教授・新潟県立大学国際地域学部 [客員教授]

聴いたりすることが、大学における教育の重要な目標の一つであることは言うまでもない。このうち、ロシア語による文献講読は、さまざまなレベルで行うことが可能であって、県立新潟女子短期大学国際教養学科ロシア語コースの2年間のカリキュラムの中でも実践されており、その経験を引き継いでいる新潟県立大学でも、内容および講義の数や種類において、さらに拡充した形で行われている。一方、ロシア語による講義を、大学院生ではなく、いわゆる学部学生を対象にして行っている例は、日本国内の大学では一般的とはいえない。ロシアの大学へ留学した者は、留学先でロシア語の講義を聴講する機会が得られるが、すべての学生に留学の機会を与えたり、留学を義務付けたりすることは現実的とはいえない。また、留学先で聴講する講義について、その内容やレベルについて要望したり、学生の理解や講義の効果を測定することも困難である。

これらの状況から、新潟県立大学におけるロシア語教育カリキュラムの策定にあたって、本学の授業として、ロシア人教員によるロシア語講義を設置することを企図した。その結果、2009年度から適用される新しいカリキュラムの中に、「ロシア言語文化論A」「ロシア言語文化論B」を設置することが、2008年度内に決定され、冒頭に掲げたようなシラバスが定められた。

この講義の前提となったのは以下のような条件である。

- ① ロシア語ネイティブスピーカー教員がロシア語のみを使用して講義する
- ② 履修対象者はロシア語を24か月（以上）学んだ学生とする
- ③ 補助的に通訳する者を介在させず、教員と学生のみで行う

①は、本学に国立太平洋大学（ロシア・ハバロフスク）から客員教員として赴任予定の教授もしくは准教授が担当することを想定したものである。②は、本学カリキュラムにおいては、第7セメスター開始時点における学生のロシア語学習歴は、もっとも長くて24か月であることに拠っている。③は、大学院を有するような大学であれば、ネイティブスピーカー教員がロシア語で講義する一方で、大学院生や留学経験者など、聴解力が高い者を補助者として同席させ、必要に応じて通訳させる、といった形で進めることもあり得るが、本学においてはそのような可能性がないことによる。

この前提に基づいて、国立太平洋大学クラビーヴニクと新潟県立大学水上・柳町との間で、初回講義が開講される2012年4月まで、内容と実施方法に

関する協議を重ねた。「ロシアのことわざと成句」をテーマに定め、クラ
ビーヴニクが講義の骨子となるテキストの原案を執筆したうえで、学生の到
達度を勘案しながら、表現や内容を平易にする作業を共同で行った。

3 講義の実施1：2012年度

2012年4月、クラビーヴニクが客員教授として着任し、他の授業科目（「ロ
シア語コミュニケーション」等）と共に、「ロシア言語文化論A」を開講し
た。2012年度の履修学生は8名であった。水上は担当教員ではないが、講義の
大部分に臨席した。その目的は、1)講義を録音すること 2)学生の理解度
を見極め、講義計画に修正が必要かどうかを協議するための判断材料とす
ることであった。後日、録音した音声を、学生が復習に利用できるよう提供
することとなり、そのための編集作業とmanaba folioへのアップロードを水上が担
当した。

各回の講義は以下のように実施された。

- ① 「今回のテーマ」の提示
- ② ロシア語で講義
 - (ア) 重要部分は板書を併用する
 - (イ) 講義内容は細かく区切り、そのつど学生を指名して、キーワード
や概念の理解を確認する
 - (ウ) 確認の結果、学生が理解できていない、あるいは理解が不十分で
ある、と判断されることがある。学生の間で理解に差がある場合
は、理解している者に説明させることもあるが、多くが理解して
いない場合は以下のような手段を用いる
 1. より平易な例を挙げる
 2. これまでに行った講義内容を復習する（当日の講義だけでなく、
必要に応じて過去の回の内容にも戻る）
 3. 特定の語（抽象概念を表す語、専門用語など）が理解の妨げに
なっている場合は、教員が露和辞典の該当ページを示し、学生に
和訳を読み上げさせることで語義を確認させる
 - (エ) 特に重要な部分は、学生を指名してフレーズ全体を日本語訳させ
る
 - (オ) 学生を指名して意見を求める
- ③ テキストの配布と復習・宿題もしくは予習の指示

4 講義の実施2：2013年度

2013年4月に本学に在職していたのは、ガリーナ・ラヒナ客員教授であった。クラピーヴニクの執筆によるテキストに基づき、ラヒナ教授が講義を行った。2013年度の履修学生は9名であった。2013年度も水上は講義の大部分に臨席した。テキストは2012年度とほぼ同様のものが使用され、テーマや素材も同一であったが、教員が交代したことで、当然ながら、講義の進行にはある程度の相違が生じた。学生への問いかけがやや減少し、その分、教員が語る部分が増えたように感じられたが、それによって講義の効果が減少したと考える根拠はない。講義の進め方に教員の個性が反映されるのはいわば当然のことであり、今後とも、担当者が交代する都度、各教員の裁量によって形が変わっていくものと考えられる。

5 履修者からの評価・他の教員からの評価

2012年度履修学生による授業評価アンケートは、回答者が5名と、履修者の約6割にとどまった。従って、その数値をもとに何らかの評価を下すことは困難であるといえるが、ほぼすべての設問において回答者の8割（5名のうち4名）が最高の評価を付与していることから、学生の満足が高かったと結論することは可能である。なお、2013年度授業評価アンケート結果は、本稿の執筆時点でまだ公開されていないが、2012年度との比較が可能になるなど、今後のための貴重な資料とすることができると思われる。

また、2012年7月10日には、第12回目の講義を、FDの一環として「平成24年度国際地域学部公開授業」として学内公開し、講義終了後には研究会を行った。公開授業・研究会に参加した教員からは以下のような感想が寄せられた（「FD委員会便り」No.2 平成24年11月22日発行 より転載）。

- 1 今回の授業の感想を自由に記述してください。
 - ・ 2、3年次にロシア語を学び、4年次にこのような専門的な内容を学習できるのは、学生にとっても学びがいがあると思った。
 - ・ 学生のロシア語の理解が高いことが分かった。
 - ・ 先生のロシア語の1つ1つを受け止め理解しようとする学生たちの姿勢が印象的だった。
 - ・ 今日の12回目の授業までどのような過程を経てきたのか知りたかった。
 - ・ ジェスチャーを交えての講義、コミュニケーションも多く、とても楽しい授業だった。

- 2 今回の授業を参観して、ご自身の授業をどのように振り返られましたか。また、自分の授業に生かしたいと思ったことなど、何でも自由に記述してください。
 - ・ 先生の表情、表現が豊かで、見習いたいと思った。
 - ・ ゆっくり学生の理解を確認しながら進めておられたことはすばらしい。
 - ・ 常に学生たちに話しかけ、問いかけているスタイルが本当に良かった。
 - ・ 「ロシア語の聴解」と「ロシア語の習得に必要な比喩の理解」が同時に進められるという特色ある授業だった。大いに参考になった。
 - ・ 口頭の説明と板書の組み合わせや、ロシア語で話させたり日本語に訳させることで理解の確認・共有を図ることなど、参考にしたいと思った。

- 3 公開授業・研究会はいかがでしたか。何でも自由に記述してください。
 - ・ 授業の概要に関する日本語の資料があり、助かった。
 - ・ 異文化に触れることができて、とても勉強になった。
 - ・ 貴重な授業を公開していただき、ありがとうございました。

6 問題点および今後のための検討課題

2012年度・2013年度のいずれも、講義運営にあたってもっとも困難だった点は、履修学生が就職活動などの理由で欠席を余儀なくされることが珍しくなかったことである。学修の完成を目指すべき最終学年の学生がこのような状況におかれるのは、日本の大学が抱える構造的な問題ともいえるが、もっとも不本意なのは学生本人であろう。自主学习用に供されている講義の録音を聴くことは、講義に臨席することには遠く及ばないものの、欠席以降の講義に出席するための準備という意味では重要であろう。現時点では、欠席した回の録音を聴くことはあくまでも任意であって、課題とするところまでは至っていないが、今後、欠席によって理解に遅れが目立つ学生が出た場合などは、より強く指導することも検討すべきであろう。

また、現在第7・第8セメスターにおかれているこの講義を、1学期早めて、第6・第7に移動させることも検討中である。二つの講義のうち一つの配当を第6セメスター（以降）とすることで、学生には、3年次と4年次の2回、履修の機会を与えることが可能になる。第5セメスターまでに集中的にロシア語を学んで、高い語学力を身につけることができた学生は、この講義を3年次に履修し、他の分野も学習しながらゆっくり学んだ学生は、4年次に履修して仕上げとすることができるのである。この変更は可能な限りすみやかに実現したいと考えている。

本講義で使用しているテキストは、クラピーヴニクと水上の間でさらに検討を加えた上で、教材として上梓することを予定している。また、本講義の理念をまとめた論文「新潟県立大学学生のためのロシア語教育課程の一環としての『ロシア言語文化論（ロシアのことわざ）』」が、2013年3月、太平洋国立大学発行の論文集「アジア太平洋地域における多文化間の対話」²に掲載された。本稿には、その論文と、講義資料のうち一回分の日本語訳を資料として付す。

1 参考資料として、一回分のテキストと和訳を付す。

2 Межкультурный диалог в пространстве Азиатско-Тихоокеанского региона. Изд-во Тихоокеан. гос. ун-та, 2013.

〔資料1：関連論文〕

L. F. クラビーヴニク

ロシア ハバロフスク、

国立太平洋大学

水上則子

日本 新潟、新潟県立大学

新潟県立大学学生のための

ロシア語教育課程の一環としての

「ロシア言語文化論(ロシアのことわざ)」¹⁾

外国人学生がロシア語を学ぶにあたっては、確立されて久しい教授法の伝統に従って、さまざまな種類の決まった言い方を必ず学ぶことになっているが、その一つに、ロシアのことわざと成句がある。ロシア語教育研究に従事する者にとって、この教材が興味深いのは、この言語単位が、話者のことばを「グレードアップ」するからである。したがって、外国語としてのロシア語講座においては、それらの学習は教授法からみて特別な意味をもっており、通常は、実践的な(すなわち話すことを重視する)傾向を持ち、それに対応して、これらの言語単位の意味や、会話においてどのようなコンテキストで用いることができるかが学ばれる。それによって、外国人学生は、ことわざや言い回しを会話の中で用いる能力や、さらに、日常生活描写、社会評論、科学啓蒙、芸術などのさまざまな文体的傾向を持った言語素材の適切な理解の能力を得るのである。

しかしながら、ロシア語そのものの学習と共に、ロシア文化も積極的に学ばれている今日、ロシアのことわざと成句は、他の少なからず重要な局面で学ぶことも可能である。特に、この言語素材は、外国人学習者に対して、ロシア文化の特徴

を生の斬新な形で教えることを可能にする、なぜならば、ことわざや成句は、その中に、ロシア民族の生産活動や精神的な活動について、伝統と習慣について、ロシアにとってもっとも重要な歴史的事件についての知見を蓄積し保存しているからである。このために、今日、ことわざと言い回しは、外国語としてのロシア語教育の課程において特別な地位を占めているのであり、特殊講義、すなわち、特定の目的に特化した枠組みの中で教授されているのである。

このような特集講義の目的と課題、そして教材の選択の原則、その解釈や実行のためのアプローチは、方法論が異なり、そしてまた教育機関が異なれば、さまざまであろう。これは、方法論の伝統が複雑だからというだけではなく、ロシアのことわざと成句が、学習対象として多面的であること、なぜならそれらは「莫大な秘宝」であり、ロシア民族の歴史的・文化的・精神倫理的価値の「汲めども尽きぬ知識の源」(1,6)だからである。そして、これらの局面の中で、もっとも重要で現実的であるものが、学習の対象となるのであり、それに対応して、ロシアのことわざと成句を教育するための授業の構成と実施の方法論的な原則が打ち立てられるのである。

このように、ロシアのことわざと成句の「ことばとしての重要性」だけでは、これらの言語単位の、外国語教育における価値を十分に表しているとはいえない。ロシアのことわざと成句は、学習対象として、認識を広げる大きな可能性を持っており、この意味において、外国語教育において特筆すべき価値を有しているのである。この語学教育における価値が、外国語としてのロシア語教育課程における学習に際して、常に十全に用いられているわけではない、という事実は、明確

な目的をもってさまざまな高等教育機関やさまざまな語学学校で行われている教育方法の実践の分析と統合を不可欠なものとしている。

新潟県立大学（日本）の学生のための特殊講義「ロシア言語文化論（ロシアのことわざ）」の立案にあたっては、ロシアのことわざと成句の歴史のおよび文化的意義が特に考慮された。したがって、まさにこれらの面を学ぶことがこの特殊講義の基盤におかれた。その際に考慮されたことは以下の通りである。

第一に、民衆口承文芸の最古のジャンルのひとつとして、ことわざおよび成句は特別な歴史的な価値を持っている。なぜなら自身の中に、歴史的な人名や名称、ロシアにとってもっとも有名な歴史上の事件への言及を持ち続けており、その中では、家庭用の日用品、職業、ロシア民族衣装の構成要素など、ロシアの現実の生活から消滅した名称も見ることができるからである。この意味において、ロシアのことわざと成句は、さまざまな歴史時代のロシアの日常生活の独自の縮図のような「博物館」となっており、外国の学生たちに、敷居が低く覚えやすいかたちで知識を与えることができるのである。

例えば、「Не красна изба углами, а красна пирогами（肝心なのは家のしつらえではなく、ピロークだ）」というロシアのことわざは、昔のロシアの暮らしについて沢山の興味深いことを語るのに役立つ。ここでは、ロシアの生活に関連する物品を指す、次のような言葉が用いられている。「изба」（ロシアの農村における住居家屋）、「пирог」（パン生地に具を包んで焼いたもの。ロシア料理の中でも好まれるものの一つで、現代でも同じである）、「красный угол」（ロシアの農村家屋においてもっとも美しく尊重された場所で、聖像画が掛けられていた）。

このことわざから外国の学生たちにこんな話をすることもできる—ロシアの農村家屋における「красный угол」は、「красное место」と呼ばれることもあった、なぜならそこには食卓があって、その席につくよう勧められるのは重要な客だけだったからである（このことを物語っているのは、「Красному гостю – красное место（りっぱな客には立派な席）」というロシアのことわざである）。

「Мал золотник, да дорог（ゾロトニクは小さいが高い）」というロシアのことわざからは、次のような話をするができる—1917年まで、ロシアには、ゾロトニク（4.25グラム）、フント（400グラムもしくは96ゾロトニク）、プード（16キログラム）という独自の度量衡システムがあった。ゾロトニクは銀や金の計量に用いられていた（ここからこのことわざの次のような意味が生まれたのである。「小さくて目立たない者でも、非常に価値があり高価なこともある」）。

ロシアのことわざと成句は、ロシアの歴史についても非常にたくさんのことを語るのに役立つ。たとえば、ロシア史においてモスクワが非常に大きな役割を果たしてきたことである（なぜならロシア語には、モスクワに関することわざや成句が非常に多く見られるからである）。

これらのことわざと成句が生まれた時代はさまざまであるため、モスクワとロシアの、多様な時代における状況を反映している。特に、「Москва не сразу строилась（モスクワは一日にして成らず）」ということわざは、モスクワが非常に長い時間をかけて建設されてきたことを物語っている（現在モスクワがある場所にはじめて建築物が建てられ始めたのは9世紀から10世紀のことである）。「Москва от копейечной свечки сгорела（モスクワは三文のろうそくで焼けた）」と

いうことわざは、モスクワの最初の建築物は木造であって、このためしばしば大火事が発生し、建物の大部分を焼失したことを物語るきっかけとなる。ロシアのことわざと成句は、モスクワが13世紀の初頭からモスクワ公国の中心となり、14世紀からはモスクワ大公国の中心となり、15世紀中葉以降はロシア帝国の首都となったことを語るのに役立つ。しかしながら、モスクワがいかにしてロシアの首都となったか、という物語は非常に複雑である。一方では、すべてのロシアの都市は、モスクワがロシアの都市の中で最も重要であることを認識していた（このために「(モスクワはすべての街の母)」ということわざが生まれた）。他方では、他の都市や公国に対するモスクワの態度は、しばしば非常に過酷な、容赦ないものであった（たとえば、非常に大きな貢物を課した）。これを物語っているのが、「モスクワは涙を信じない」「モスクワは母のことも、継母のこともある」といったことわざである。

ロシアにとって困難であった時代、例えばタタール・モンゴルのくびきの時代について物語るロシアのことわざも数多い。その時代には、ロシアの都市や村々が荒廃したり破壊されたりしたが、この時代を証言するロシアのことわざや成句は否定的な感情がこめられている。「招かれざる客はタタール人以下」「ママイが通った後のようだ」「ママイが通った後のようにからっぽだ」などである。

歴史的な面からことわざと成句を学ぶことで、外国人学生には、ロシア人が非常にしばしば、歴史的な性質を持つことわざや成句を口にすること、しかし、通常は、なぜそのような言い方をするのか、それらのことわざや成句がどのような歴史的な事件を物語っているのかをすでに知らない、ということに注目させることも

できる。

第二に、ロシアのことわざと成句の中には、ロシア民族の伝統や習慣、振る舞いに関する不文律、最古の迷信や俗信、予兆などが反映されている。このため文化的な価値を有していることは間違いない。

たとえば、周知のとおり、ロシアでは常に客をもてなすことが重要視されてきた。古いロシアの習慣に従って「客をもてなす」ことは、すなわち、おいしい食物をたっぷりと供することを意味していた。このため、ルーシでは客のためには何も惜しまないことになっていた。これを物語っているのが、例えば、「(客にシチャーを惜しむな、もっと具を入れて注げ)」(すなわち、「客にはおいしい食べ物を非常にたっぷりと出すべきだ」というロシアのことわざである。「ロシア式歓待」の特性を知るのには、次のようなロシアの成句も役に立つ—「神よ、客を与えたまえ。しからば主人も腹がふくれる」なぜならこのような成句が生まれたのは、ロシア人たちは客のために、常に「不文律」によって、主人たち自身はふだん家で食べられないような料理や御馳走を作ってきた（そして今日でも作っている）からである（このためロシアでは、貧しい家庭であっても、客のためにはいつも豪勢な御馳走をしてきたのである）。

ロシアのことわざと成句の文化的な要素を系統立てて学ぶことで、一方では、外国人学生たちに、「ロシアの民族性」の特性と、一定の状況における行動の民族的に固有な形式について知識を与えることができ、他方ではそれを説明することができる。

例えば、ロシア人たちが何らかの真剣なことに取り組もうとしているとき、次のような言葉をかけられるのが常である。「毛も羽根もないように！」そして言わ

れた方は、伝統に従ってこう答える。「まっぴらだ！」これらの成句もまた歴史的な解説を有している。なぜなら古い迷信と結びついているからである。「邪眼」を信じること、そして、人もしくはその仕事は「邪眼を受ける」かもしれないということを信じることである。（このため今日でも、ロシア人たちは「邪眼を受けない」ように、ことが終わるまでその話をしないのが普通である。）過去においては、ロシアの獵師たちもまた、邪眼を受ける可能性があると考えていた。このため、獵における成功を願われることがないようにと望んでいた。獵師たちは、逆に、獵における不首尾が願われるように、すなわち、鳥も獣も殺さないようにと願われることを望んでいた。鳥を意味するのが「羽根」であり、獣を意味するのが「毛」で、従って獵師たちに「毛も羽根もないように！」（文字通りには、「獣も鳥も殺さないように」である）という言葉かけたのであった。一方、獵師は、やはり邪眼を与えることがないように、こう答えるのを常とした。「まっぴらだ！」このため、ロシア人が「毛も羽根もないように！」と言い、「まっぴらだ！」と答えるときには、彼らは、言葉の上では、すべてが不都合で不首尾であることを願っている（邪眼を受けないように！）が、実際に願っているのは、すべてがうまくいき上首尾であることなのである。

ロシアのことわざと成句の多くは異教と結びついている。たとえば、今日でも「（予定は）いつなの？」という問いに対する答えとして、非常によく用いられるのを耳にする「木曜日の雨の後さ！」（すなわち、いつになるかわからないし、もしかすると決してないかもしれない）という成句がある。この成句は異教の神ペルーン信仰と結びついている。ペル

ンは、雷と稲妻を支配した神で、木曜日は「ペルーンの」日だった。伝説によれば、木曜日には人々はペルーンに雨乞いをするのができた。人々は非常にしばしば木曜日を待ち受け、それからペルーンに精いっぱい雨乞いをして、そして長い間雨を待ったが、雨は降らなかった。このため、「いつあるかわからないこと」そして、「決してないかもしれないこと」を話題にするとき、ロシア人はこう言うようになったのだった。「それは木曜日の雨の後になるだろう」。

文化面からことわざと成句を学ぶにあたっては、外国人学生には、ロシア民族の伝統や習慣、言い伝えや迷信を物語ることわざや成句は、その発生の歴史を熟知している必要があるので、翻訳や理解が非常に難しいことに注意させなければならない。

第三に、ロシアのことわざと成句の中には、すべてのロシア人およびロシア民族全体にとってもっとも重要な概念やイメージについての情報が保たれており、ロシアのことわざと成句を学ぶことで、外国人学生たちに、ロシア文化にとってもっとも意味深い概念を教えることができ、その民族的な性質や民族的な特殊性について語ることができる。

たとえば、ロシアのことわざと成句が語るように、ロシア文化には、「ばか」という特殊な概念がある。「ばか」は非常に複雑なロシア的概念である。一方では、ばかとは賢くない人間のことであり、何事かを一緒に行うのが困難な者である（これを物語るのが、たとえば、「ばかとビールを作ることはできない」ということわざである）。このため、ロシアにおいてももちろん、どこでもそうであるように、「ばか」が愛されることはなく、「ばか」については非難を込めて語られる。他方、それと同時に、ロシアの「ば

か」は少し羨みの目で見られる。なぜなら彼らは、なぜか上首尾と幸運に恵まれるからである。ロシア人は言う。「Дуракам всегда везет. (ばかはいつも運がいい)」「Бог дураков любит. (神はばかを愛する)」なぜだろうか？それは、「Дуракам закон не писан (ばかのために書かれた法律はない)」つまり、そういう人間は自分に独自の法に従って生きており、一般に認められた法律や法則には従わないからかも知れない。そういった広く認められた法は、必ずしも人間を幸せにしないのである（これについては、たとえば、ロシアの昔話の中で語られている）。

ことわざと成句を素材としたロシア的な概念の研究は、異なる文化においては、同一のもしくは類似した概念が「独自のものとして」、すなわち民族的な特殊性ととも理解されることが非常に多いことを学生たちに説明する一助となる。たとえば、多くの民族にとって、「大地」「火」「水」といった概念はひとしく重要なものであるが、文化が異なれば、これらの概念は、単に似ているか、あるいはそもそも異質なものとして理解される可能性があるのである。(?)

ロシア文化にとってのこれらの概念の重要性を物語るのは、「火と水は皇帝ときさき」ということわざである。ロシアのことわざと成句は、ロシア文化における「水」のとらえ方に、否定的であると同時に肯定的でもあるという二面性があることを物語っている（火はわざわざ、水もわざわざ、されど火も水もなければますますのわざわざ）。

「水」に対する否定的な見方が生まれたのは、水は非常に危険なものであり、「水」が非常に強力で見えない自然の猛威だからである。このため、ロシアのことわざはこのように警告する：水は

わざわざいのもと。一方で、「水」の力を物語っているのは、「水が石を穿つ」（その意味は、「何か小さな、目立たないものであっても、大きなもの、勢いのあるものに打ち勝つあるいは制することができる）」ということわざである。

「水」への肯定的な見方は、「水」がロシア人にとって魔法のような力を持っているところから生まれている。第一に、水は未来を予見するのに役立つ（水占いの伝統については、「水を覗いたようだ!」というロシアの成句が物語っている。）第二に、水には治療する力があり、病を克服するのを助ける（ロシア人たちは今日に至るまで病気の赤ん坊を水につけて、その際にこう言うのが常である：「Гачоуが水をはじくように、赤ん坊の病気も去れ」）。そのほかに、貧しいロシアの農民にとって、パンと水はもっとも重要な、そしてしばしばもっとも基本となる食品であって（パンと水は百姓の食べ物）、このせいもあってロシア人たちは水について敬意をこめて語ったものである：「パンは父さん、水は母さん」といったように。

この観点からことわざと成句を学習するにあたって、外国人学生に留意させることが非常に重要なのは、ある民族の文化を理解するためには、その文化に特徴的な概念を知るだけではなく、異なる文化の中に見受けられる、諸概念の民族的特徴について理解していることが必要であることである。

この特別講義の教材を実地に使用し評価する過程で、ことわざと成句の学習は、教育の方法論のうえでも特別な重要性を持っていることが明白に示された。なぜならば、この教材は、学生たちに一連の言語学上の概念や用語に親しむことを可能にしたからである。「прямое значение», «обобщенный смысл-一般化された

意味», «иносказание寓意», «буква- лыйный перевод 直 訳», «эмоциональная окрашенность 感情 的な 色 付 け», «положи- тельная/отрицательная оценка 肯定的 / 否 定的 評 価», «ритмическая организация 韻 律 を 持 っ た 構 造», «рифмованные выраже- ния押韻を用いた 表現», «структурная организация構造的 編成», «тематическое разнообразиеテマの多様性」 などである。これらの学問上の概念は、外国語を学ぶ学生たちにとって非常に重要である。なぜなら、それらを知っており、適切に理解していることは、学生たちの勉学やその後の職業人としての活動を最適化することに寄与するからである。特に、あらかじめ「専門用語の蓄え」を作っておくことは、学術関連テキストの理解を容易にし、専門的な語彙を、卒業研究その他の論文執筆の過程で正しく自覚的に使うことを可能にする。

たとえば、ロシアで最初の記述文学作品が現れるよりも前に生まれた、ロシアの民衆による創作の一ジャンルとしてのことわざと成句は、「芸術的な」思惟の特徴を鮮明に示している。それは、芸術的な形象を作り出す手段（隠喩、比喩、擬人化などである）の適用を基盤とする

表現、イメージの喚起、感情の表出などであり、さらに、ひとまとまりのことばの特徴的な音声構造である。ことわざと成句の「芸術的アспект」の一貫性を持った分析を行うことで、あまり複雑でない言語資料であれば、外国人学生を、これらの芸術的形象性という方法に親しませることが可能になり、それによって、学生たちにロシア語の芸術的なテキスト（ことわざや成句よりもその性質において複雑な言語作品）を適切に解釈させることが可能になるのである。

このように、外国語教育という面において、ロシアのことわざと成句は、きわめて有用なかけがえのない言語資料である。これは、ロシア語のさまざまな現象を観察したり、実例を挙げて示したりする機会を与えるだけでなく、ロシアの歴史とロシア文化の特性を語り、ロシア的なものの特性を紹介し、ロシア人の一定の条件下における行動の特性を説明する契機ともなる。その結果、この実践が示すように、この相当に複雑な言語資料に対する外国人学生の興味は喚起され、それが刺激となって、学生がさらに、自らのイニシアチブによって（自らの興味や必要に合わせて）自主的に勉学を進めることへとつながっていくのである。

文献

1. Алефиренко Н.Ф. Фразеология и паремиялогия: Учеб. пособие для бакалаврского уровня филологического образования . - М.: Флинта: Наука, 2009.

注

1. 本稿は以下の論文の日本語訳である。
Крапивник Л. Ф., Мидзуками Н. Спецкурс «Русская культура: пословицы и поговорки» в курсе русского языка для студентов Ниигатского префектурального университета.

〔資料2：講義資料〕

第12回 ロシア語の比喩的な言い回し

言語を美しくまた感情表現に富むものとするために、比喩が用いられる。比喩は言表の意味を理解し、言表の情動を「感じとる」のを助ける。このために、ロシア語においては、何かが何らかのもので喩えられているような言い回しが非常に多いのである。その例となるのは、「調子は白い煤みたいだ」¹「ママイが通ったあとみたいに何もない」²といった言い回しである。

ロシア語の比喩的な言い回しは、通常、人間や事物の情動的な特徴づけのために用いられる。

例：

火事場へ行くみたいに走る（意味は「非常に急いで」）

亀のように身体を引きずる／歩く（意味は「非常にゆっくりと」）

鶏が脚で書くようだ（意味は「とてもきたなく、ぞんざいに」）

猫と犬のように暮らす（意味は「しばしば喧嘩をする」）

ロシア語の比喩的な言い回しは、次のような構造をもっているのがふつうである：AはBのようだ あるいは AはBそのものだ

例：

犬の5番目の脚のように必要だ³

年寄り子どもそのものだ（意味は「老人は赤ん坊に似ているものだ」）

しかし時には、比喩的な言い回しの中に「のようだ」や「そのものだ」という語がないこともある。

例：

言葉は銀、沈黙は金（意味は「時には話すよりも黙っている方がよいことがある」）

舌こそ我が敵（意味は「あんなことを言うのではなかった！」）

比喩的な言い回しの中では、否定による比喩が用いられることが非常に多い。否定表現を伴う比喩的な言い回しは、次のような構造を持っている：AはBのようではない。

例：

愛はジャガイモではない、窓から投げ捨てるわけにはいかない⁴

仕事はオオカミではない、森へ逃げていったりしない（意味は「この仕事は急いでやらなくてもいい、後でやることもできる！」）

ロシア語の比喩的な言い回しを理解するためには、そのような言い回しの中に存在する形象を理解する必要がある。例えば、「二つの水滴のようにそっくりだ」という言い回しを理解するためには、二つの水滴を思い浮かべる必要がある。それらは通常、極めて似通っている。実際に、この「二つの水滴のようにそっくりだ」という言い回しの意味は、「完全に似ている」である。一方、「猫の涙のような」という比喩的な言い回しを理解するためには、もちろん、猫が泣かないことを知っていなければならない。ゆえに、この言い回しの意味は「きわめて少ない、ほとんどない」なのである。

ロシア語の比喩的な言い回しを、外国人が容易に理解できるのは、言い回しの中に出てくる形象を理解できる（すなわち、思い浮かべることができる）場合で

ある。例えば、次のようなロシア語の比喩的な言い回しを理解するのはたやすいだろう。

（誰かを／何かを）自分の五本の指のよう
に知っている（意味は「熟知している」）

2かける2が4になるように分かりやすい／明白だ（意味は「完全に分かる」）
薬局のように正確だ／正しい（意味は「完全に正確で正しい」）

しかしながら、ロシア語の比喩的な言い回しの中には、非常にしばしば、ロシアの現実生活に見られる特別な「情景」が登場し、それらはロシア人にとってはなじみ深い、分かりやすいものであるが、外国人にとっては未知のものであり、それゆえに理解できないものである。

例えば、ロシア人は、「誰かが恵まれた豊かな、何不自由ない生活をしている」ということを言いたい場合に、「バターの中でチーズが滑って行くようだ！」という言い方をする。ロシア人はこの場合どのような「情景」を思い浮かべるのだろうか？ チーズは、美味しい、高価な、滋養に富む食物であり、バターも、効果で美味しく滋養に富む食物である（ロシア人はバターを非常に好み、パンにもバターをつけ、粥やその他の料理にもバターを加えて食べるのが普通である）。チーズはバターの中で滑るように動く（たとえば、スキーが雪の上で軽々と滑るように）。この故に、豊かで快適な暮らしは、栄養豊かなチーズが美味しいバターの中で、快適で軽々と滑って行くさまに（ロシア人にとっては）似ているのである。

外国人にとっては、ロシア語の比喩的な言い回しのうち、歴史的な出来事と結びついているもの（ママイが通った後の

ように空っぽだ、の類である）や、古いロシアの伝統や習慣、迷信などと結びついているものも、理解するのが難しい。たとえば、「水の中を見たようだ！」という言い回しは、「水の中で」占いをするという伝統と結びついている（何かに水を注ぎ、その水を覗き込んで、自分の問に対する答えをそこに見出そうとするもの）。このため、誰かが何かを「正しく予言した」とき、ロシア人は「水の中を見たようだ！」と言うのである。

比喩的な言い回しはすべての言語に存在する。そしてさまざまな言語において、多くの類似した比喩的な言い回しが見出される。たとえば、ロシア人が、何かが「やすやすと、問題なく」行われるときに、「バターを敷いたみたいになんてうまく運ぶ！」と言う。類似の比喩的な言い回しは、たとえば英語のような他の言語にもみられる。

本講における基本概念

比喩

否定

言表の情動

（比喩的な言い回しの）構造

（情景を）思い浮かべる

（水の中で）占いをする伝統

ロシア語のことわざと言い回し

年寄り子どもそのものだ

言葉は銀、沈黙は金

舌こそ我が敵

仕事はオオカミではない、森へ逃げて
いったりしない

火事場へ行くみたいに

亀のように

鶏が脚を使うように

猫と犬のように

二つの水滴のように

猫の涙のような

自分の五本の指のように
2 かける 2 が 4 になるように
薬局のように
バターの中でチーズが滑って行くよう
だ！
バターを敷いたみたいだ！
水の中を見たようだ！

設問と課題

1. 比喩的な言い回しの主要な特徴はどのようなものか
2. ロシア語においては、比喩的な言い回しは何のために用いられるか
3. 比喩的な言い回しはどのような構造を持っているか
4. ロシア語の比喩的な言い回しを外国人が容易に理解できるのはどのような場合か
5. ロシア語の比喩的な言い回しにおいては、ロシアの現実生活に由来する、どのような特別な「情景」が用いられているか
6. ロシア語の比喩的な言い回しに類似したものはあなたの母語にもあるか

注

- 1 煤といえは黒いものだが、それが「白い」というところから、常軌を逸している、ひどく悪いことを意味する
- 2 ママイ汗はここではモンゴル民族の象徴である。「タタールのくびき」時代に、モンゴル民族によって収奪されたことを引き合いに出して、備蓄が尽きた状態などを表現する
- 3 犬にとって脚は4本で充分で、5本目は不要であるところから、まったく必要ないことをいう
- 4 恋愛は理屈では割り切れない、叶わない恋や、周囲から批判されるような関係であっても、断ち切ることは簡単ではない、ということわざ

